

『<楽園>の死と再生』第2巻出版に寄せて

日本大学文理学部教授 野呂有子

このたび、『<楽園>の死と再生』第2巻（金星堂、2017年3月）が上梓された。15本の論文タイトルと執筆者を以下に挙げる。（論文掲載順；敬称略）

- 1 特別寄稿 The Trial of Christ in *Paradise Regained* 新井明

#### Milton 以前

- 2 Malory's Virtuous Love: the Conflicition between Courtly Love  
and Christianity through Lancelot and Guinevere's Love 小川佳奈

- 3 Shakespeare's Catholicism behind the Veil of a Romantic Tragedy:  
Romeo as a Palmer and Juliet as a Roman Shrine 恩田佳代子

- 4 A Comparative Study of Gertrude as Mother or Wife  
in *Hamlet's* Two Texts Q1 and Q2: James I as Son and King 藤木智子

#### Milton 詩と散文

- 5 「火薬陰謀事件」連作詩における王政批判 金子千香

- 6 祈りから救済へ：  
*A Mask* における the Lady と Sabrina の間に見られる救済の枠組み 桶田由衣

- 7 『楽園の回復』における“gates”に関する一考察：  
ミルトンによる翻訳詩篇および『楽園の喪失』と比較して 上滝圭介

- 8 Satan, Samson, and Ambition : With Reference to  
Heinz Kohut's Psychological Analysis of the Self 大濱えり

#### Milton 以降・英米の詩と小説

- 9 *The Heart of Midlothian* にみられる *A Mask* の影響 村松瞳子

- 10 「楽園喪失」の物語としての *Frankenstein* : 「太陽」の視線に着目して 末光裕子

11 English Bildungsroman Epistemology:

*A Study of A Portrait of the Artist as a Young Man*

松山博樹

12 マーク・トウェインが描く<楽園の喪失>

野村宗央

13 境界を飛び越える： *Song of Solomon* における Milkman Dead の移動

茂木健幸

Milton と日本文学

14 A Comparative Study of *Samson Agonistes* and Takeo Arishima's *Samuson-to-Derira*  
(*Samson and Delilah*)

山田順子

記念論文

15 *The Faerie Queene* から *A Mask Presented at Ludlow Castle* へ：

Dual Heroism の枠組みと the Female Hero の概念を中心として

野呂有子

次に日本大学英文学会会員により執筆された論文について、その内容を手短かに紹介する。

2は、サー・トマス・マロリー作『アーサー王の死』における騎士ランスロットと王妃グィネヴィアの愛を従来の宮廷愛の伝統の中に位置づけ、マロリーの主張する理想的な愛のかたちについて考察した。そして、マロリーの主張するところは、神への愛を前提とした一対の男女の愛であると論述した。

3は、シェイクスピアがロミオとジュリエットの愛の成就の過程を「巡礼」に見立てて描いている点に着目した。さらに「巡礼者」(ロミオ)と「聖者」(ジュリエット)が最終的に「自死」を選ぶ理由について「シェイクスピア隠れカトリック説」を援用して考察した。

4は、『ハムレット』の二つのテキスト(Q1、Q2)の差異に着目した。主人公が母を罵倒する場面がQ2のみに認められる点、出版時期にジェームズ1世が王位に着いていた点、検閲許可によりQ2出版が可能になったという時代背景を指摘し、Q2には、新王に対するシェイクスピアおよび劇団の忖度が認められることを明らかにした。

5は、ジョン・ミルトン作のラテン語詩 *In Quintum Novembris* (『11月5日について』) および “*In Proditionem Bombardicam*” (「火薬陰謀事件について」) におけるミルトンのカトリック批判、ジェームズ一世批判を明らかにする。その際、教会説教や国王演説から火薬陰謀事件に関する当時の言説を探り、本作品が当時の英国の宗教的動向と深く関わってい

ることを *EEBO* (*Early English Books Online*) を活用しつつ検証した。

6 は、ミルトン作『ラドロー城で上演された仮面劇』を、その種本の一つとされる、ベン・ジョンソン作『快樂と美德の和解』と比較検討し、当該劇作品における、救済を求めると救済者の関係の重要性を明らかにした。

7 は、聖書およびミルトン作『楽園の喪失』に頻出する “gate / gates” の語が、『楽園の喪失』の続編である『楽園の回復』には僅かしか出現しない、という現象に着目した。そして、その理由を『楽園の回復』におけるサタンの性格造形、さらに「翻訳詩篇第 87 篇」に顕著に認められる詩人の楽園観に求めた論文である。

9 はサー・ウォルター・スコット作『ミドロージアの心臓』に『ラドロー城で上演された仮面劇』の一節が引用されている点に注目した。狂女が歌う姿は『仮面劇』の淑女を想起させること、さらに歌の内容がヒロインであるジーニーと淑女の「良心」に関わる点を中心にして、スコットがミルトンから継承し発展させた内容について考察した。

11 は、ジェイムズ・ジョイス作『若き芸術家の肖像』を教養小説(*bildungsroman*)の典型例として取り上げ、精神分析的考察を行った。教養小説の特徴である社会と主人公の軋轢、心理的葛藤を精神分析学の観点から分析するという従来あまり見られなかったアプローチを行う点に本論の意義がある。

12 は、これまで、主に聖書批判の作品として捉えられてきたマーク・トウェイン作「サタンの日記からの一節」が、〈夫婦の絆〉という主題を持った「イヴの日記」へと連なる過渡的な作品であることを、『楽園の喪失』との比較検討を通して明らかにした。

13 は、トニ・モリスン作『ソロモンの歌』(聖書では通常『雅歌』と訳されている)における主人公ミルクマン・デッドの移動に着目・考察した。ミルクマンは、第一部では都市の内部を巡回し、第二部では都市の外、アメリカ南部へと移動する。彼の移動は、排除の内側へと進む越境の旅であると結論づけている。

15 は、ミルトンが言論・出版の自由を擁護した『アレオパジティカ』の一節でエドモンド・スペンサーを「わが英国の賢明にして真摯な詩人スペンサー…スコトゥスやアクウィナス以上に教え上手の人物」と称賛している点に着目した。そして、*Dual Heroism* の枠組みと *the Female Hero* という概念を用いて『妖精の女王』と『ラドロー城で上演された仮面劇』を比較検討し、ミルトンがスペンサーから継承、発展、結実させた内容を明らかにした。(ちなみに本論考は、2016 年 6 月 27 日、京都大学人間・環境学研究科において行った「Spenser から Milton へ—*dual heroism* の枠組みと女性の位置」、および、2016 年 9 月 24 日、日本大学文理学部で行われた、日本大学英文学会主催の英文学シンポジウム「ミルトンの文学的意義」における野呂の発表「Spenser から Milton へ—*dual heroism* の枠組みとキリスト教叙事詩」が基になっている。)

作品タイトルから明らかなように、掲載論文 15 本の内、7 本が英語論文である。これは日本の英文学研究者の研究内容を広く英語で国際的にも知らしめたいという編集責任者野呂の切なる願いに執筆者の方々が応えて下さった結果である。内 1 本は、2015 年エクセター大学で開催された第 11 回国際ミルトン学会で発表された。会場に集まった諸外国の

ミルトン研究者の数は20名前後であり、日本におけるミルトン研究の内容とミルトン作品受容の問題が国際的にも注目されていることが再確認される形となった。

1の巻頭論文は野呂の学部・大学院時代の恩師である新井明博士のご許可をいただいて、数ある新井論文の中から一本を選んで掲載させていただいた。また、論文をお寄せ下さった執筆者の方々全員が校務や学業で多忙を極める中、時間を作って新たに論文を仕上げして下さいました。執筆者全員に改めてお礼を申し上げたい。

今回の編集委員会を立ち上げるにあたって、日本大学英文学会会員であり、ミルトン研究者でもある、田中洋子氏と山田恵摩氏に新たに加わっていただき、各論文の一層の精度向上と論集の充実を図った。このお二人、そして、今回も連絡係や編集作業をご快諾くださった上滝圭介氏と野村宗央氏にもこの場を借りてお礼を申し上げておく。

掲載論文の半数以上は日本大学英文学会月例会や、野呂論文同様、シンポジウムでの発表成果を基にしたもの、あるいは、卒業論文や修士論文の研究成果を踏まえつつ、精密の度を高める中で誕生したものである。その意味で、本論集は日本大学大学院文学研究科英文学専攻および日本大学英文学会を母胎として生まれたと言ってよい。改めて、日本大学英文学会と日本大学大学院文学研究科英文学専攻、さらに関係各位の方々に謝意を表したい。